



日本福祉大学

国際福祉開発学部だより

News Letter Faculty of International Welfare Development

October. 2016 vol.

08

〒477-0031 愛知県東海市大田町川南新田 229 日本福祉大学 国際福祉開発学部 <http://facebook.com/nfuiwd/>

日本福祉大学 国際福祉開発学部ニュースレター第8号発行の運びとなりました。2016年度前期の学部行事から、夏休み中の学生各自の取り組み、卒業生の近況まで、お伝えしたいこと満載です。

目次

- 1～3 World Youth Meeting 開催報告!!
- 4 国際会議 ICoME2016 in 京都 報告
- 5 国際交流・海外体験!
◆マレーシア留学 (浅野光映)
◆1年目の夏に海外ボランティア (周藤春菜)
- 6～8 卒業生のオシゴト探索!
◆英語教員として! (阿部智弘)
◆国際協力の現場から! (板倉千佳)
◆夢に見たキャビンアテンダントとして (實崎優子)
- 8 日本語教員養成プログラム開始!
学部の後期予定



国際協働学習プロジェクト World Youth Meeting 報告!!

教授 影戸 誠

学んだ英語が力となる、友情となる、国際貢献となる。そんな場が文部科学省後援の学部行事 World Youth Meeting (ワールドユースミーティング WYM) の国際英語プレゼンテーション大会です。今回の第18回ワールドユースミーティングは8月7日、8日の2日間にわたって日本福祉大学の東海キャンパスで開催され、カンボジアの王立プノンペン大学をはじめ、フィリピン、マレーシア、韓国、台湾、インドネシアなど7カ国から本学海外連携校の大学や高校25校、国内からは25校の参加がありました。学部の1・2年生全員が実施に取り組み、「Building Our Shared Future」をテーマとして、10年後の未来に向けて私たちは今なにをするべきかが話し合われました。

英語を使い、その働きを感じるもの



日本では英語はEFL (English as a Foreign Language)、つまり「外国語」として学んでいます。フィリピンやマレーシアのように日常の生活の中で、英語を使いながら学ぶ第二言語 (Second Language) ではありません。日本の98.2%は日本人であり、日本語のみで苦勞なく毎日を送っています。このような環境で国際的な英語力を身につけるにはデザインされた「学びの場」

が不可欠となります。

英語で、相手と長い時間テーマに取り組み、協働でプレゼンテーションなどを作り上げた経験がありますか? 一番確実な英語習得のコツは「使うこと」、そして「英語の働き方を体感すること」であり、国際福祉開発学部では1年目からワールドユースミーティングでそれを体験できるようなカリキュラムとなっています。

日本人と外国人学生で構成された各チームでどうプレゼンテーションを作っていくのか話し合われ、完成



するまで意見の食い違いを英語を使って埋めていく体験をします。その作業の中で、学生はお互いの文化を理解し、合意にいたる貴重な経験ができるのです。違いを認め、合意に至るのが、本学部のワールドユースミーティングを通じての「平和学」であるのです。

協働し、決断できる力

ワールドユースミーティングでは、この学部で大切に行っている Task Based Learning（仕事をこなすことで力をつける学び）を実践しています。全学生が12の係りに分けられ、定例会の会議で開催にむけて、多数の課題に取り組みます。方向性や実施・運営方法について、詳細の話し合いがされ、学生自ら決めていきます。そして、英語のパンフレット作成、宿泊先の手配、司会原稿の作成、当日運営の係間の調整や学外のホストファミリーや企業とも連携し、協働しながら様々な準備をグループごとに進めていきます。初めてこのような大規模のイベントに関わり、1年生は戸惑うことがよくありますが、2年生のリーダーシップの下での作業を通じて、グローバル環境でチームの一員として働く力を確実に身につけていきます。

アクティブラーニングセッション

大舞台での発表後に少人数でディスカッション専用デザインされた教室でアクティブラーニングセッションを行い、より近い距離で発表者と視聴者が交流をします。



「フェアトレードの商品はどうして他の商品より高くなるんですか?」「日韓の歴史認識の違いを埋める方法はなんですか?」など、発表に対して質問が飛び交う中で問題への理解がさらに深まり、発表者の解決力が育ちます。そのような力が国際舞台での「伝達」「協議」「解決」へとつながり、グローバル人材としての重要な資質を育てることにもつながっていきます。

卒業後どこで働くのか

多くの学生は海外と連携した企業、職業を目指します。グローバル社会では世界を知り、誰とでもコミュニケーションできる力が求められています。ワールドユースミーティングの経験は、「世界の感触」をつか

む強烈な力となり、このような日常的なつながりを通して世界を知ることがグローバル人材になるための第一歩となります。

海外学生の声

「What I Learnt from WYM」

CHEA Vichean

Royal University of Phnom Penh (カンボジア)

I took note that I had learnt and brought many learning points back home. Travelling to a developed country like Japan had broadened my view and awakened my interest of how well the country grows.



Doing presentation with students from different backgrounds and study levels provided me a lot of skills regarding team management, time management, communication, and how to deal with unexpected challenges. Overall, WYM has transformed me into a better person who is brave, strong, confident, enthusiastic, encouraging, open-minded, helpful, curious, positive, action-oriented, solution-oriented and generous to everyone I meet in life.

「My Friends」

Chwee Sher Yen

Universiti Sains Malaysia (マレーシア)

My teammates, Masatoshi, Maho and Saya were the best teammates I have ever had. Ever since the very first day of my arrival in Japan, they were always there to accompany me. We had our meals together, prepared our presentations together, had laughs together and took 'Purikura' pictures together which adds up to my everlasting memories of Japan.

Through WYM, I have made many friends from NFU which I believe will last for a lifetime. Their warm hospitality and friendliness has definitely made



my stay in Japan a wonderful experience. The little things they did for me, and their never ending help, for example to translate Japanese words when I had difficulties in reading the menus on what to order for my meals made me so grateful to have friends like them. Their enthusiastic and warm gestures made it difficult for me to part with them on my last day.

■ 本学学生の声

国際福祉開発学部 2 年

Last year, I regretted I could not talk with our international guests so frequently. But this year I could overcome my failure of last year. I could foster my intrinsic motivation to become a good English speaker while enjoying conversations with international guests and we promised to meet again in their country again. I am very proud of having made the best of such a fruitful event that NFU offered.

去年は積極的に海外参加者と英語で会話できなかったけれど、今回の WYM では沢山話すことができた。海外ゲストとの会話で、自分の英語に少し自信を持つことができるようになり、今度会いに行くね！と約束できるほど仲を深めることができた。観光も本当に楽しかった。もっと英語の勉強を頑張ろう！と思えるようになった。この行事はこの大学にしかない素晴らしいものだった。

Through the collaborations, I felt that I could improve the way that I deliver my own opinions to others. I would always feel hesitant to say things but my participation in the World Youth Meeting allowed me to feel the importance of expressing myself. It is necessary to find solutions through dialogue, especially when there is conflict of opinions. By showing agreement with the other person's opinions, we could also suggest further improvements for better solutions. This is true facilitation.

協働作業の中で、人への意見の伝え方について考え、改善できたと思う。いつもは言わなくていいかな

とってしまうが、この WYM を通して、発言することが大切と思うようになった。人の意見とぶつかる時、そんな時こそ、話し合いが大事で解決策を見出す方法が必要だ。相手の意見に同意しつつもさらなる改善点を提案し、よりよい解決ができる。まさにファシリテーション力である。

■ 日本福祉大学附属高校の声

担当教員 中川 歩香

ひとつのプレゼンテーションを協働制作するという過程の中で、本校生徒も台湾の生徒も互いにしっかりと意見を出し合い、納得しながら最終原稿を完成させることができた。元気よくイキイキと発表をするということを目指して練習を重ね、本番はその成果が表れていたように思う。

今後の課題は、質疑応答やディスカッションへ積極的に参加することである。特定のトピックに関してディスカッションをする練習を十分に行い、次年度に臨みたい。



国際英語コース 3 年 中野 憂美

私たちはプレミーティングの時、「やらされている感があって全然楽しそうじゃない」という意見を頂きました。なので、その時より何倍も練習をしました。

本番でプラチナ賞をもらえたのは本番が成功したというより、みんなで一生懸命練習して作り上げた過程があったからだと思います。自分もみんなも前よりずっと楽しめてよかったです。

国際英語コース 3 年 北川 恵美

私達は台湾の高校生とチームを組みましたが、私たちと同じように英語が母国語ではない彼女たちが流暢に英語を話していた事には驚きました。

プレゼンテーションはみんなの力を合わせて作り上げる事ができましたが、一つだけ悔しかったのは、質疑応答を台湾の子たちに任せっきりになってしまった事です。私たちには仲間に頼らず自分から行動をする力が足りなかったと改めて思いました。私たちも、彼女たちに負けないくらいの英語力を身につけないと思いました。

国際会議 International Conference for Media in Education (ICoME) 2016 in 京都 報告

国際学会での韓国学生との協働プレゼン&若手研究者賞

教授 佐藤 慎一

8月18日から20日まで、京都外国語大学を会場としてICoME2016が開催され、本学部の3、4年生12名が4チームに別れ、協定校である韓国全南大学の学生と協働で参加・発表しました。うち1チームは見事に若手研究者賞を受賞しました。ICoMEは、教育とメディア・情報通信技術（ICT）活用に関する国際会議であり、例年、韓国、中国、日本を中心に、アメリカ、フィリピン、インドネシアなどからの発表もあります。当然ながら英語での発表・議論となります。

〈韓国の学生と協働研究・発表〉

学生達は、ICoMEの学生セッションで発表します。学生達は、お互いの大学での調査・研究、論文執筆に関する指導をベースとして協働で調査・研究を進め、結果を論文としてまとめ発表します。日韓の学生間の連携のためには、テレビ会議、LINEなどもフル活用します。学会開催場所で韓国の学生と対面後も、発表前日深夜および当日直前まで、普段はあまり見られな

いほどの真剣さで準備に励んでいた姿が印象的でした。

〈活動の意義・身につく力〉

難題にともに取り組み、やり遂げた仲間は、学生にとっての何よりも財産となります。それだけでなく、学力・スキル面の向上も期待できます。国際学会での発表では、論理性が厳しく問われます。自分の意見を述べる際には、適切な裏付けが必要であり、他国の参加者にも納得してもらえる明快さも求められます。こうして鍛えられる協働作業力・コミュニケーション力は、どのような仕事でも必要とされる、現代社会で重要とされる力です。1度の経験でこうした力が身につくものではありませんが、韓国学生との絆を継続・発展させ、継続的に活動していくことで、大きな力を身につけてくれることと信じています。

以下、参加した学生の声を紹介します。

国際学会発表と韓国からの友達

準備段階では、空き時間を見つけては、Skypeで発表内容について韓国の学生と議論しました。英語を使つてのコミュニケーションのため、意見交換で誤解がなかったか等を確認できるよう、毎回ビデオカメラで撮影しながらSkype会議を進めました。グループの中に、2年前に本校のWorld Youth Meetingで会ったことのある、韓国の大学院生がいました。当時と比べて深い議論をすることができ、自分の成長を実感することができました。学会期間中は、他大学のハイレベルな方々とも触れ合うことができ、刺激を受けるとともに、自分の次の課題も見えてきました。しっかり対応し、次回はよりよい協働作業と発表にしていきたい

3年 山本 由梨子（東海南高等学校）

と思います。このような機会はとても貴重なものであり、提供いただけることに感謝しています。



発表時の様子（中央が山本さん）

協働作業から学ぶ今後の取り組み

ICoMEへの取り組みを通じて、協働作業の大切さを学びました。私達チームはeSportsをテーマとし、普及率や若者の意識を日韓で調査し、今後の展望と問題を学生目線で考察しました。メンバー各々の主張が強く内容の調整に苦労した結果、内容面の準備に多大な時間を費やし、発表前夜に、宿舎で午前4時まで全員で練習したものの、準備は決して十分ではありませんでした。それだけに、受賞式で名前を呼ばれた時には、チームの誰もが驚きました。不安や意見の衝突も多くあったチームではありましたが、それだけに、一丸となって課題を乗り越える団結力は強いものであったと感じています。チームの絆を大切にしながら、自

3年 鈴木 航介（高等学校卒業程度認定試験合格）

分もより大きな貢献ができるよう、個人の力も高めていきたいと思っています。



Young Scholar Award 受賞（中央が鈴木さん）

国際交流・海外体験！ 学部では、学生の海外体験をチカラにするおてつだいをしています。

マレーシア留学体験（大学間連携に基づく半期留学プログラム）

2年 浅野 光映（日進西高等学校）

私は、2016年2月よりマレーシア科学大学に交換留学生として滞在しています。普段の何気ない生活の中でも刺激を受ける毎日です。国教がイスラム教なので、1日5回のお祈り、食事の制限、断食、服装など厳しい決まりに戸惑う時もありましたが、イスラム教において1年で1番大きな行事であるハリラヤに参加して、良い文化だなあと感動しました。

またマレー系、チャイニーズ系、インド系の主に3つの人種が住む多国籍国家で、それぞれの人種がそれぞれの宗教を持ちます。公用語は英語とマレー語なのですが、それぞれの人種が独自の言語を持っており、日常ではたくさんの言語が飛び交っています。日本では日本人と日本語がほとんどを占めているので、当初は、そのようなマレーシアの環境がとても不思議で興味深いものでした。

大学では教育、人文、語学の学部で授業を取りました。交換留学生がクラスにいと、先生は英語で授業をしてくれます。もちろん生徒も英語が堪能で、自分も負けないように頑張りました。また、マレーシア科

学大学では毎学期150人ほどの生徒が世界から集まります。交換留学生同士の交流もたくさんあり、いろいろな国の文化も知ることができました。

最後に、マレーシアは物価が安く、食べ物が美味しく、治安も東南アジアの中では良い方です。気候は毎日暑いですが、日本の夏ほどではありません。なにより人は優しく、のんびりした性格なので、とても居心地が良いです。残りの留学生活も積極的に現地の人と交流して、もっとマレーシアを知りたいと思います。



ハリラヤ（断食明け祭）に知人宅に招待された（前列右が浅野さん）

大学1年目の夏に海外ボランティア体験！

1年 周藤 春菜（聖霊高等学校）

私は夏休みの間、1週間インドネシアのバリ島へボランティアをしに行きました。ボランティアの内容は孤児院に住み込みながら子供たちのお世話、料理や掃除をすることでした。

孤児院での生活はテレビはなく、携帯電話も使えない状況でしたが、それらがなくても思いっきり楽しむことができ、当たり前の生活ってなんだろうと考えさせられました。

私は、この活動を通して、1日1日を大切に、毎日を全力で生きることの大切さを学びました。また、バリ島はリゾート地として有名ですが、貧困地域もあるということを知ってほしいと思いました。



孤児院で子供達と一緒に（周藤さんは後列左）

2017年度からはクォーター制導入で さらに海外経験やインターンへのチャレンジを後押しします！

国際福祉開発学部では、学生のフィールドワークを後押しするために様々なプログラムを準備しています。入学年次に2週間の海外研修（マレーシア、フィリピン、カンボジア、インド、アメリカ等）を全員が経験。2年次以降は、学生の自主企画で単位を認定したり、マレーシア協定先への中期留学機会があります。

2017年度以降は、2年次後期から3年次の前期にかけて中期でインターンや海外研修を行っても留年せずに卒業できる「クォーター制」カリキュラムを導入します！

卒業生のオシゴト探検！ 先輩の就職先はどんなだろう？

| 高等学校の教員になって



2017年卒業 阿部 智弘（磐田東高等学校）

私は現在、静岡県内のオイスカ高等学校で英語科教員として働いています。オイスカ高校では、天地自然の恩恵によって生かされていることへの感謝の心を持つ、心豊かな生徒の育成に取り組んでいます。また、失われつつある日本の良き心を呼びさし、人間や他の

生命が共生する「ふるさと」に根付く、若き国際人の育成を行っています。勉強、部活動、国際交流にと元気あふれる高校です。この学校に4月から働いてあっという間に半年が過ぎてしまいました。私は中学生の時に、英語の教師という職業に憧れました。しかし、高校へ進学し、今まで好きだった英語が嫌いになりました。それでも進路選択の時には、教員免許を取得したくて国際福祉開発学部に入学をしました。その後、中学生の時に感じた英語教員への憧れが再燃しました。そして、今年から高等学校で英語の教員をしています。

私が初めて教員になった4月、今まで味わったことのない緊張と不安に襲われました。周りの先生方とうまくやっていけるだろうか、生徒に教育ができるのだろうか、など弱気になっていました。しかし、緊張しながらも生徒と触れ合うことで次第に自分にも余裕が出てきて、楽しいという実感を持てるようになりました。

た。余裕が出てくると、周りに気配りができるようになりました。周りを見ることができるようになったとき、私は大学生の時に教職の授業で学んだ、「教員の仕事の中で授業は氷山の一角だ」という言葉を思い出しました。4月5月の2ヶ月は自分の事で精一杯になって授業のことしか頭になかったということに気づいたのです。

仕事に慣れ始めた6月、授業以外でも生徒指導、問題があったときの対応、テスト作成、学校運営に関わること、寮勤務、部活動、もちろん教材研究もしなければなりません。それ以降、必死に周りの先生方、生徒に迷惑がかからないよう、仕事に没頭をしました。このことは夏休みが終わった2学期からも続けています。

これらのことを続けていて今感じていることは、教師は、授業では先生になり、生徒を叱らなければならない時には、生徒の親に成り代わり、生徒が落ち込んでいる時にはカウンセラーのようになり、部活動ではコーチになります。これらのことは、幅広い知識がなければできません。まだまだ知識や経験のない私は毎日が勉強で毎日が修行だと思いつつ、この仕事と向き合っています。私の勤務校の校長はいつも、「生徒の見本にならなければ指導、教育はできない」と話をします。まさにその通りだと感じるとともに、これから先も勉強をし続けて、1人前の教師となり、生徒に「この先生ならついていきたい」と良い影響を与えられるような教師になりたいと思いつつ、努力をしています。

| 国際協力の現場で

2012年卒業 板倉 千佳（高浜高等学校）

国際福祉開発学部を卒業して4年半の間、地元の高齢者施設で社会経験を積んだ後に青年海外協力隊に応募し、2016年1月からウズベキスタン共和国にて「障害児者支援」という分野でボランティア活動をしています。

大学時代の学び（WYM、ファシリテーション、異文化理解）や経験（友人との遊びや議論、社会福祉実習、海外研修等）が今の私の思考や発想に大きく影響しています。大学時代、教授に青年海外協力隊を受けることを相談



聴覚障害の高齢者クラブで日本文化を紹介



難聴児寄宿舎学校に子供達と

したところ「まずは社会経験を積みなさい。日本の社会の仕組みを知ると、他の国との比較ができるようになるから」と助言をいただき、大学卒業後、就職をしました。職場では、部署内でのほうれんそう（報告・連絡・相談）や他職種との連携の重要性、家族対応など、“仕事上での人との関わり”を身につけました。教授のアドバイスが今のウズベキスタンでの活動に活かされています。

また、ウズベキスタンで生活していると外国人が珍しいため、よくここに住む方々に「あなたの専門は何？」と尋ねられます。すると私は大学で受けた講義や、就職先の高齢者施設の話をしてします。日本で自分の専門について深く考えていなかった私にとって、毎回、

自分自身と向き合わせてくれるクエスチョンです。そのため、興味を持った出来事や疑問に思ったことは調べてみることに、そして挑戦してみることに。それがいつか自分の専門になる、と信じてこちらの日々を過ごしています。

私は現在、聴覚障害者のセンターで活動しています。聴覚障害者へ日本文化紹介をしたり、高齢者には体操を教えたり、重

複障害児の自宅に行ったり、難聴児寄宿舎学校へも講師として通っています。はじめは「こんにちは」しか言えなかったロシア語手話も、今では日常会話であれば出来るようになりました。ロシア語手話は旧ソ連諸国の聴覚障害者が使用しているため、隣国キルギスタンで聴覚障害者と出会った際もロシア語手話が通じました。ロシアやベラルーシでも通じ、嬉しく思いました。

残りの一年半の任期の間に、ロシア語手話をマスターすること、そして日本の聾学校とウズベキスタンの難聴児寄宿舎学校の交流を図ること、家に閉じこもりがちになる盲ろう者を外に導くことを目標に活動していきたいと思っています。

教員から一言！ 海外ボランティアとして活躍する卒業生は他にもいます！

在学中に海外体験を積む機会が多い国際福祉開発学部では、板倉さん以外にも毎年、国際協力ボランティアに、在学生や卒業生がチャレンジしています。この夏は、インドネシアで青年海外協力隊として活動中の二人の卒業生を訪問し、現地での仕事や今後のキャリアについて話してきました。大家族のようなアットホームな学部ならではのつながりが、卒業してからも続いています。



現地 NGO との農村調査と一緒にいきました。
インドネシア語の上達ぶりが頼もしい二人です。



左の「コミュニティ開発」で派遣されている丹羽俊策さん（2012年度卒業、丹羽高等学校出身）と右の「障害児者支援」の森田充祐樹さん（2013年度卒業、岐阜県立岐阜商業高等学校出身）。インドネシア地元の新聞に活動が掲載されて喜んでいる所。

（「異文化理解」担当：小國和子）

夢に見たCAとして空へ

今日9月24日は、私がマレーシアの航空会社 AirAsia X のCA（客室乗務員）として初めて乗務した日です。マレーシアの首都クアラルンプールから、関西国際空港に向けて飛び立ちました。

大学在学中、WYMなどの国際交流やカナダへの留学を経て、将来は海外を拠点にして働きたいと思うようになりました。私は英語が好きなこと、海外旅行と飛行機が好きなこと、そして人と接することが好きなことから、私の好きな事が全て詰まった仕事はCAしかないと思ってきました。私にとってはまさに夢のような仕事です。外資系の航空会社は身長制限が厳しいのですが、私は身長があまり高くなりません。そのハンデをカバー



CAへの夢を叶えた修了証

2012年卒業 寶崎 優子（日本福祉大学付属高等学校）

する為に、自動車メーカー本社で、受付業務や海外からのお客様に対する工場案内をする中で接客を学びつつ、英会話スクールでも働きながら英語力をさらに磨いてきました。常に自分自身が外資系CAとして働いていることをイメージしながら、決して諦めずに努力し続けた結果、AirAsia Xから内定を頂き、夢を実現させることができました。今後、クアラルンプールを拠点にして、アジアを中心に乗務する予定です。

ずっと夢に見てきたことを仕事にすることは、もちろん楽しいことばかりではなく、理想と現実のギャップにぶつかる事もあります。1日12時間以上飛ぶ事もあるため、想像以上に体力勝負であり、またお客様全ての命を預かる責任の重い仕事でもあります。日々のフライトでは毎回違うクルーと乗務し、同じメンバーで飛ぶことは二度とありません。だからこそ、安全で思い出に残るようなフライトをお客様に提供するという同じ目的を持った仲間と、チームワークで働きながら、フライトが終わったときには、達成感とともに、まるでこの仲間と長い間一緒に働いてきたかのような絆を感じます。

今振り返ってみると、学生時代も卒業後も、常に、自分の夢を追い求め、しかも、それをしっかりと自分の中で形にしていけることがとても重要だと感じています。私のあとに続く後輩が登場することをとても楽しみに待っています。

2017年4月から日本語教員養成プログラム開始！

国際福祉開発学部が目指す多様な社会をサポートできる人材育成のために、2017年度から日本語教員を養成する科目群を開始します！

*学生時代に実際の日本語教育現場で実践する機会を提供し、外国につながる子どもに対して学習や就職支援、学校での異文化適応などの支援ができる卒業生を育てます。

学部の後期予定

- 10月 JICA ボランティアセミナー
海外体験報告会
オープンキャンパス
クリーンキャンパスキャンペーン
Global Lounge ハロウィーン企画
国際フィールドワークⅠ国内研修開始
- 11月 2017年度ゼミオリエンテーション
3年生就職活動トリガーイベント
- 12月 4年生卒業論文提出期限
Global Lounge クリスマス企画

- 1月 学内TOEICテスト
卒業論文発表会
- 2月 国際フィールドワークⅡ
アメリカ、フィリピン、マレーシア、カンボジア
- 3月 学位記授与式・卒業記念交流会
在学生オリエンテーション
中部国際空港企業説明会
中部国際空港アルバイトオリエンテーション

発行人：日本福祉大学 国際福祉開発学部

〒477-0031 愛知県東海市大田町川南新田 229

TEL. 0562-39-3811 FAX. 0562-39-3281 <http://facebook.com/nfuiwd/>

編集人：国際福祉開発学部 学部長 小倉 美津夫、准教授 小國 和子

お問い合わせ：kokusai@ml.n-fukushi.ac.jp

国際福祉開発学部 ブログ

フェイスブック

